学術コミュニケーションと大学図書館

土屋俊
(千葉大学)

目次

- 1990年代の学術コミュニケーション状況
  – 学術出版の状況
  – 大学図書館の状況
- 電子ジャーナル時代の到来
- 電子ジャーナル化への対応
  – 物品購入から許諾契約へ
  – コンソーシアム交渉
  – 製本配架からナビゲーションへ
  – 日本発の雑誌はどこに？

学術コミュニケーション (世界と日本)

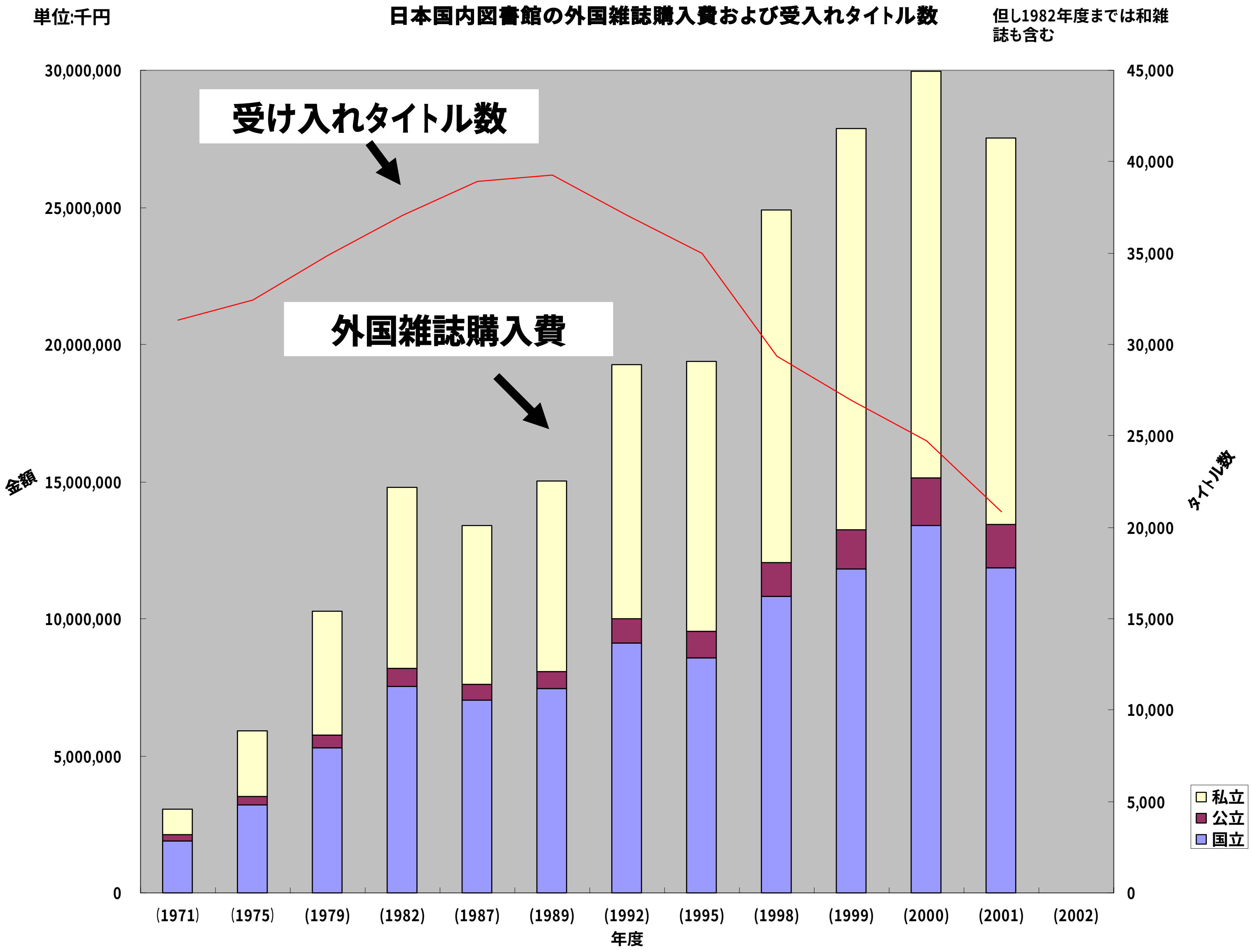
- 学術雑誌価格の高騰(“Serials Crisis”1980年代から)
  - (世界的に) 論文量の増加 (タイトル2倍、タイトル当論文数1.6倍)
  - (世界的に) 商業出版社の寡占化と市場(価格)制御
  - (日本の場合) (外国為替の要素はあるが) これまで学会も図書館(大学) もほとんど無力 (補助金依存・代理店依存)
  - (日本の場合) 外国出版社による国内学会の「買収」
- 電子ジャーナル状況の萌芽
  - (世界的に)
    - TULIP、JSTOR、
    - OHIOLink/EJC、COC
  - (日本の場合)
    - NACSIS-CATなど
    - CD-ROM(ネットワーク利用)

日本における危機

- 1990年代で日本が海外から買う情報の量が激減した
  - おそらく特定タイトルに集中して購読
  - 外国雑誌センター館は機能せず
  - 国立国会図書館でも同様(以上) の傾向
- しかし、支払額は増加！
- この時期に科学技術基本計画開始？！
- 最大の危機は、危機の無自覚 (大学図書館としての反省の必要)

日本の大学における問題群

- 雑誌購入にかかわる予算システム
  - 教室ごとの決定で、図書館はあまり調整しなかった
  - （国立では）当り校費から支出が原則
- 図書館は出版社とでなく、代理店・取次ぎを相手
- 図書館と教員とのコミュニケーションの不足
- 日本の学会誌の購読に関する無関心
  - 会員買取システム
  - 機関購読概念の欠如



単位:千円
日本国内図書館の外国雑誌購入費および受入れタイトル数
但し1982年度までは和雑誌も含む
受け入れタイトル数
外国雑誌購入費
金額
タイトル数
30,000,000
25,000,000
20,000,000
15,000,000
10,000,000
5,000,000
0
45,000
40,000
35,000
30,000
25,000
20,000
15,000
10,000
5,000
0
(1971)
(1975)
(1979)
(1982)
(1987)
(1989)
(1992)
(1995)
(1998)
(1999)
(2000)
(2001)
(2002)
年度
私立
公立
国立

電子ジャーナル時代の到来

- 1990年代後半におけるインターネット爆発、インターネットインフラの確立
- 商業出版社の電子化
- エルゼビアの主導
  - SD21
  - 円価格
- 各社の追従
  - プリント･プラスからEプラスへ
  - コンソーシアムへの対応

国立大学図書館協議会電子ジャーナルタスクフォース

- 2002年からの契約を念頭において2000年9月設立
- 出版社との直接交渉を原則（当初は、主要5社ターゲット）
- 契約条件の改善（1大学1サイト原則、ILL、学外者利用、プライス・キャップ等）
- 利用環境の改善（ミラー・アーカイブ設置、利用者講習担当者研修、統計情報の正確化(COUNTER対応)等）
- 予約購読意思決定システムの改善、「集金」システムの確立の推進（「全学予算化」等）
- ただし、契約は大学ごと（条件は国立大学全体を一つのコンソーシアムとみなさせる）
- 相当程度の成果：「2002年は（日本の国立大学の）電子ジャーナル元年」
- 現在20数社と交渉

図書館サイドからみた変化

- 物品購入から使用許諾へ
  - すべては契約！
- タイトル予約購読からデータベース（パッケージ）へ
  - Big Deal の(一定程度の）妥当性
  - 二次データベースとの連携
- 利用者サービスのバーチャル化
  - ポータルによる誘導、利用環境整備
  - 「保存」「管理」の概念の変化
  - ILLへの影響（急速な減少。1990年代のあだ花？）
- 厳密な利用統計の可能性(COUNTERプロジェクト)
  - 将来のプライシング・モデル
  - 対学内（Value for moneyによる議論）
- 「コンソーシアム」の重要性の増大
  - 購読規模＝収入規模をめぐる戦い

さて、日本の学会誌は？

- かならずしも利用している研究者･学生がいる大学が機関購読しているわけではない
  - 「利用」は電子ジャーナルのアクセスで確認可能
  - ただし、機関購読がないからといって、研究室にないわけではない
- 電子ジャーナル化が遅れている
  - Open Access ジャーナル（J-STAGEを含む）のビジネスモデルはなかなか困難
  - 大規模プラットフォームの隙間にニッチを探索

SPARC事業における図書館の役割

- サイトライセンシングの実現
  - タイミングが重要
  - 学会側ではコンソーシアムに対応できる体制の必要性
- 大学関係者としての共同歩調
  - 著者＝利用者であるという状況の認識
  - 学術情報流通に関する専門知識とその提供
  - 機関レポジトリの実現（セルフ･アーカイビング支援）